

大谷翔平選手の動向が気になって気になって仕方がない

MVPももちろん、移籍問題はホントにどこに決まるんだろう？ その前に、ヒジやケガは順調に回復しているのだろうか？



大谷翔平選手 日本全国の小学校へ6万個の野球グローブを寄贈・・・ニュースリリースより

日本全国の小学校へ6万個の野球グローブを寄贈

大谷選手が、日本全国の特別支援学校を含む小学校二万校へ六万個の野球グローブを寄贈したというニュースを聞いた。六万個というのはすごい数だ。おそらく金額的にもすごい規模であろう。それに、こうした寄贈方法も初めてという。寄贈に添えたメッセージもまたすばらしい。『野球を通じて元気に楽しく日々を過ごしてもらえたら嬉しいです。このグローブを使っていた子供達と将来一緒に野球ができることを楽しみにしています！』。思わず笑みがこぼれるようなメッセージである。各校に三つずつというこ

大谷選手の動向が気になって仕方がない

とで、なぜ三つだけなのかと騒がしいが、ちゃんとした理由がある。キャッチボールなら二つあればすむが、左利き用の一個含まれるというのだ。大谷選手らしい細やかな気遣いである。

それにしても、MLBのオフシーズンはとてもさびしい。活躍する大谷選手を見るのができないからだ。シーズン中は、余程の用事がなければBS放送にかじりついて、大谷選手の一挙手一投足を見るのが日課となっている。

特に二刀流の時はほんとにドキドキする。試合中は、大谷選手と一体化している。いま、大谷選手について、



二刀流は再来年か・・・NHKより

ヒジの手術は成功？

まずはヒジの術後経過だが、写真で術後の姿を見るとまことに痛々しい。ギブスが取れた姿を早く見たい。来シーズンは打者としては出場できるが、投手は再来

移籍金はどうでもよい

今年号が発行された直後には移籍問題が解決しているだろうか？とても心配だ。現時点ではエンゼルス

今シーズンは過剰酷使

今シーズンの大谷選手はやはり身体を酷使し過ぎた。三月からWBCがあり、優勝したが出ずっぱりで、すぐさまシーズンが始まり、しかもほぼ休まずプレーしていた。壊れない方がおかしいのだ。

ファンとしてはさびしいけれども、来シーズンからはぜひ適度に休んで欲しい。

年、したがって二刀流も再来年となるのか？

できれば、来シーズン中に二刀流に戻って欲しい。でも無理は禁物だ。

術後の経過、MVPの行方など、大ファンとしても、当新聞名の「東北再興」の旗手としても非常に心配なのだ。

もし万が一、これらの心配事のひとつにでも何か異変があったら、野球の話だけでは済まないだろう。

まず、「東北全体」が嘆くことになる。次に日本全体。そして、アメリカであり、世界に波及する。これはけっして誇張ではない。

ファンとしてはさびしいけれども、来シーズンからはぜひ適度に休んで欲しい。

今年号が発行された直後には移籍問題が解決しているだろうか？とても心配だ。現時点ではエンゼルス

一年契約を拒否したようだ。移籍の有力候補はドジャースとのこと。

ドジャースは獲得に積極的であるし、報酬の余裕もあり、エンゼルスと近く、暖かいのもいいという理由だ。

移籍契約の年俸は史上最髙とか騒がしいが、大谷選

手にとつては大した関心事ではないだろう。

すでに使い切れないお金があるはずだ。その上にさらにお金を重ねても大した意味はないと思う。彼にとつて移籍問題が重要なのは、「より大きな舞台で活躍したい」からである。

永遠の野球小僧

筆者は、大谷選手は「永遠の野球小僧」であると思つている。とにかく野球が大好きで、常に最高のプレーをすることを願うだけであり、その結果として

でもないことをしでかすのだ。

だから、目先の成績なども二の次なのだ。それだからこそ、数々の心配事を無事クリアして、これからもずっと「永遠の野球小僧」であり続けて欲しいと願う。



19日の右肘手術後初めてファンの前に元気な姿を見せた・・・スポニチアネックスより

大谷翔平の移籍先候補・本紙予想

球団	投手の柱	打者の柱	年俸総額	地区	直近5シーズン順位
ドジャース	カーシヨイ	フリーマン	5位	ナ西	19 ↓ 20 ↓ 21 ↓ 22 ↓ 23
ジャイアンツ	デービス	ウエブ	10位	ナ西	3 ↓ 3 ↓ 1 ↓ 3 ↓ 4
マリナーズ	カステイヨ	J・ロドリゲス	18位	ア西	5 ↓ 3 ↓ 2 ↓ 2 ↓ 3
レッドソックス	ベイバース	デイバース	12位	ア東	3 ↓ 5 ↓ 2 ↓ 5 ↓ 5
メッツ	千賀 滉大	アロンソ	1位	ナ東	3 ↓ 4 ↓ 3 ↓ 2 ↓ 4
エンゼルス	大谷 翔平	大谷 翔平	6位	ア西	4 ↓ 4 ↓ 4 ↓ 3 ↓ 5

移籍先候補・予想・・・日刊スポーツより

新シリーズ【東北を再発見する旅】…⑤ 震災後の福島①

どうしても東日本大震災後の福島を思い出さなければならない

福島への複数回の旅

今回も引き続き東日本大震災に関連する取材の旅を取り上げることにする。取り上げる旅先は、大震災後に何度か訪れた福島である。

取り上げたのは、あれから十二年以上経過して、いまならば、冷静に振り返ることができると思うからである。

また、現在は福島第一原発の処理水問題が世界中で話題になるが、あの当時の状況に触れられることもほとんどなくなり、当新聞だけでも取り上げたいと考えるからでもある。

とはいえ、このシリーズのタイトルである「東北を再発見する旅」からは大分離れてしまうことをまえてお断りしておく。

福島との最初の関わりは国会議員への取材

大震災後の福島との最初の関わりは、実は現地への取材ではなく、ある国会議員との出会いから始まった。その国会議員とは、福島県会津地区を選挙地盤とする小熊慎司議員だった。

当新聞を発行してからすぐの二〇一二年七月発行の第二号の取材記事として取り上げるためだった。

小熊議員は当時、「みんなの党」に所属する参議院議員だった。

取材の経緯は、みんなの党所属の仙台市議の早坂あつし議員、現在は日本維新の会所属の衆議院議員であり、党の東北支部長であるが、その早坂議員から紹介していただいたのだった。それにしても、同じ党所属の市議からの紹介とはい



取材した参議院の議員会館の執務室風景①
2012年撮影

え、創刊してすぐの、名もないボランティア新聞の取材を快く引き受け、三時間超の取材によく対応してくれたと思う。

取材場所は参議院の議員会館で、筆者は初めての訪問だった。

入口で入念なチェックを受けている最中も、また、取材を終えて帰るときも、メディアでよく見かける議員や大物タレントがすぐ近くを通り過ぎていくのをながめ、多少舞い上がっていたのを思い出す。

小熊議員から聞いた話①

取材の内容は非常に微妙な話も含まれているので、すべて披露するわけにはいかないが、マスメディアには流れてこない非常に刺激的な生情報が聞けた。

まずは、大震災後の福島は、同じ被災県の宮城県や

岩手県と決定的に違っていたことがあった。

それは、放射能汚染で被災地域に入れないことだった。そのため、復旧工事どころか、どこがどうなっているのかの現地調査さえできない状態だったのだ。

さらに悲惨だったのは、犠牲者の捜索もできないことだった。遺族の張り裂けんばかりの思いはいまも想像することさえできない。

それが福島第一原発の二〇キロ圏内のことだった。二〇キロ圏外のガレキ処分も、他県で引き受ける先もなく、すべて福島県内で行うことになった。

さらに複雑なのは、福島県はもとと、「浜通り」、「中通り」、「会津」と三つに分かれ、歴史的な経緯もあり、仲が良くない。この対応にも苦慮しているという話を聞いた。



取材した参議院の議員会館の執務室風景②
2012年撮影

小熊議員から聞いた話②

また、当時作成した「みんなの党」の二〇キロ圏内の土地の買い上げ、長期借り上げ法案」を議員が説明して回ったが、「戻ろうとしているのに、戻るといいうのか、町を破壊する気か」ときびしく責められたという。

大震災発生の年の秋に行われた住民アンケートでは、戻る、戻らないという意見が真つ二つに割れたという。

除染できても戻らないという若年層のアンケート結果も多く見られた。

これもその後、残念ながら「実現」することになってしまったのだが…。

そうした状況下にある地域の市町村長に、そのときすぐに、「戻る」、「戻らない」の決断を迫るのはあまりにも苛酷すぎたのだ。

しかし、元住民のこの先どうするかを首長に聞きたいという切実な気持ちも分かる。

したがって、首長たちは、悲惨でひどい板挟み状態だったのだ。

放射能の除染問題ものつべきならぬ状況だったし、第一、どれくらいお金がかかるのか、いつ終わるのかの見通しも立たない。

そして、どこまで除染するのか、除染で発生した汚染土はどうするのかという問題もあった。

そして、あれから約十二年後の今年一月に、筆者が福島県富岡町を訪問してみ

て、汚染土処理の実態が分かった。

元は田んぼだったであろう土地に山のように積み重ねられた汚染土が、何層にも重なった黒い袋が、何層にも重なって果てしなく続く光景を見て、これが十二年経った除染の「成果」なのだと思う。

小熊議員から聞いた話③

大震災から一年三ヶ月の時点で、元居た場所に帰るかどうか、除染はどうするかなど、差し迫った課題に対処しなければならぬが、どの課題をとっても、圧倒的過半数は得られず、意見が割れた状態でどうすればいいのか？

先送りすれば、事態はもっと悪化する。しかし、意見はまとまらない。

強行突破しかないが、それを首長ではできない。

やはり、首長にその決断を委ねるのではなく、政府が決断しなくてはならない。一時避難の仮住まい問題をどうするか決断を迫られていた。

避難していた各市町村の臨時管理部署も落ち着き先を決めなければならぬ。他県に出ている市町村も、



はるか向こうまで大量に山積みされた放射能汚染物質がぎっしり詰まった黒い袋の山・・・
2023年1月 筆者撮影



野生化動物注意喚起の看板 2015年8月 筆者撮影



除染・富岡町の看板 2015年8月 筆者撮影

県内のよその市町村に出たところでもである。そして、多くの避難市町村は、いわき市に移転先を決めた。流入過多となったいわき市の財政問題も発生した。さらには、移転した新住民たちも、ずっと移住したままか、あるいは、戻るか、別の場所に移るかも、い

れ決めなければならない。 **小熊議員から聞いた話④** 東京電力をどうするかという課題もあった。補償問題もあった。小熊議員の所属する「みんなの党」は、「東京電力解体」の方針だった。補償について、電力側は、明確な因果関係あるものに

限定すると言っていたが、その因果関係はあいまいなままだった。風評被害もひどかったが、その補償問題をどうするかという課題ものつぎきならない状況だった。なぜ福島で発電して東京圏で消費する構造なのか、という議論も起きた。電力の地産地消議論も出てきた。

当時は、脱原発の議論も活発だった。太陽光発電はもちろん、小型水力発電、地熱発電も議論された。小型水力発電に関しては、農業用水ならば農水省管轄、川ならば国土交通省管轄で権限が入り乱れてむずかしいとの指摘もあった。当時のこうした当時の議

論にもかかわらず、結局のところ、現在は、この国の電力は原子力発電しかないという風潮に傾いてきた。あれだけの被害を出してもそこに戻るといえるのだろうか? **小熊議員から聞いた話⑤** 福島産ということでも何かも売れない。放射能数値を出せば売れない。しかし、数値は正確に発表しなければならぬ。会津は汚染地区でないのに売れない。放射能に関する知識が不足して過敏状況になっていた。それが原因で、いわれない中傷があちこちで発生した。他の都道府県で高濃度汚染が発表されることもあったが、すべて福島由来とされたが、冷静に考えれば、他の原因もあるはずだが、だれもそうした意見に耳を貸さない。

一度、他の都道府県でも一斉に調査してみてもどうかと議員も話していた。さらに、放射能汚染一色になっているが、他の汚染リスクがすっかり忘れ去られていることへの懸念も表明されていた。 **もう一度思い出すべき** あの取材を思い出しながら、この記事を書いているのだが、切迫した当時の状況がよみがえってくる。



大震災で破壊されたそのままに放置されている家屋・・・2023年1月 筆者撮影

同時にあのときの、福島を含めてこの国を何とかしなくてはならないという熱い思いもよみがえってきた。この国の人々は忘れやすい。しかし、忘れてはいけないことはあるのだ。忘れた結果、国民に良いことは起きるだろうか? ここまで書いてきて、議員への取材内容コメントだけで紙面が埋まってしまったことに気がついた。しかし、ここで福島取材の旅を終える訳にはいかない。言い尽くせないことがたくさんある。 結局のところ、次号以後に引き継いでいくしかない。次号以降では、さらに当時の福島状況に突っ込んでいきたいと思う。



あちこちに立つ帰宅困難地域の看板・・・2023年1月 筆者撮影

奥只見湖探訪



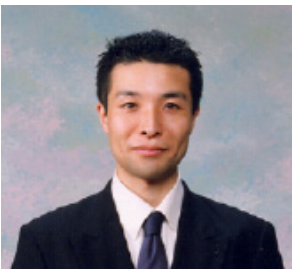
「酷道」から見える奥只見湖

東北の「秘境」の一つ

だいぶ前のことになるが、二〇一六年八月刊の本誌第五号で、『東北秘境ツアー』の「スズメ」という記事を書いた。その中で「秘境」の定義について、辞書での説明を例に引きながら、「人があまり訪れていないこと、もう一つは「一般によく知られていない」こと、とした。「人跡

執筆者紹介

大友浩平
(おおともこうへい)
奥州仙臺の住人。普段は出版社に勤務。東北の人と自然と文化が大好き。趣味は自転車と歌と旅。
「東北ブログ」
<http://blog.livedoor.jp/anagma5/>



Facebook
<https://www.facebook.com/kouchi.ootomo/>

未踏こそ「秘境」に相応しい言葉である、とも述べた。その中で、奥只見湖のことも紹介した。その奥只見湖の紅葉を見るに、一〇月下旬に足を運んできた。

奥只見湖とは

奥只見湖は、福島と新潟の県境の標高七五〇メートルの山奥にある。一九六〇年に完成した、一般水力発電所の中で最大の発電量を誇る奥只見ダムによってできた人造湖である。奥只見ダムは、高さは一五七メートル、全長四八〇メートルという巨大なダムで、このダムが堰き止めてできる奥只見湖の面積は中禅寺湖とほぼ同じ一・五平方キロ、最も深いところの水深は一五〇メートルで、最大六億立方メートルという途方もない量の水を蓄えることができるそうである。人造湖ではあるものの、元々人里離れた手つかずの自然が豊かなところなので、四季折々の景色が楽しめる場所である。

電所の中で最大の発電量を誇る奥只見ダムによってできた人造湖である。奥只見ダムは、高さは一五七メートル、全長四八〇メートルという巨大なダムで、このダムが堰き止めてできる奥只見湖の面積は中禅寺湖とほぼ同じ一・五平方キロ、最も深いところの水深は一五〇メートルで、最大六億立方メートルという途方もない量の水を蓄えることができるそうである。人造湖ではあるものの、元々人里離れた手つかずの自然が豊かなところなので、四季折々の景色が楽しめる場所である。

ところが、この奥只見湖、東北からはものすごく行きにくい。まさに「秘境」と呼ぶにふさわしい場所である。最も距離が短いのは、福島県の会津若松市から国道二二一号線で南会津町まで行き、そこから国道三五二号線で檜枝岐村を通って行くルートなのだが、なぜかその最短ルートが他のルートに比べて最も時間が掛かるといふ謎仕様である。逆に移動時間が最も少なくて済むのは、会津若松市から磐城自動車道でまず新潟市まで行き、そこから関越自動車道で魚沼市まで行き、そこから国道三五二号線まで行くというルートである。なぜ最短ルートが最も時間が掛かるかと言うと、この国道三五二号線、檜枝岐

村を過ぎて奥只見湖までの区間がものすごく山道だからである。舗装こそされているものの、道幅も狭くて対向車とのすれ違いに気を遣い、曲がりくねっていて、アップダウンもかなりある。そのような走りづらい国道のことは「酷道」と呼ばれたりするが、この国道三五二号線はまさに「酷道」である。奥只見湖があるエリアというのはそれだけ山奥ということなのもあるが、それだからこそ自然が豊かである。このルートの道すがら時折見える奥只見湖はとて

もキレイである。新潟回りのルートの方が時間が掛からないということからも分かるように、逆に新潟方面からは比較的奥只見湖には行きやすい。従って、恐らくは東北の人よりも新潟の人の方が奥只見湖に行ったことのある人は多いと思われる。ただ、それでも、途中から「奥只見シ

ルバーライン」という、全長二二キロのうち一八キロがトンネルであるという稀有な道路を通らないと奥只見湖には行けないので、新潟から来てやはり奥只見湖「秘境」という印象だと思

う。そのためか、当然のように「秘境奥只見」という看板がビュースポットに立て掛けられている。

訪れた日は平日であったが、そのような秘境であるにもかかわらず、遊覧船乗り場は長蛇の列であった。そのほとんどはツアー客であったが、そうでない私のような個人客もけっこういた。遊覧船のコースは3つある。「周遊コース」、「銀山平コース」、「尾瀬口コース」である。どれも所要時間は四〇分前後だが、銀山平コースと「尾瀬口コース」は奥只見湖の対岸が目的地である。ツアーの場合

奥只見湖の楽しみ方

は遊覧船に乗船している間にバスが対岸に移動し、着いたツアー客はそこからバスに乗って次の目的地に移動、という形が取れる。実際、ツアー客のほとんどは「銀山平コース」の遊覧船に乗船していた。ただ、個人ではそういう手法は取れない。もちろん、対岸からの帰りの船に乗って元の発着所に帰ってくる手はあるが、対岸でけっこう待ち時間が発生して時間が掛かるので、私は湖の主要部分をぐるっと一周して元の場所に戻ってくる「周遊コース」をチョイスした。

青い湖面と岸辺の色とどりの紅葉のコントラストがとてもキレイである。ぐるっと一周する間、陽光が射す方向も変わるのでそれにつれて湖面の色合いや紅葉の色合いも変わり、見ている飽きない。

湖と紅葉を堪能して遊覧船を降りて、駐車場の一角にある、食事ができてお土産が買える「奥只見ターミナル」へ。この地で実に五二年もの間、奥只見湖を訪れる人をもてなしてきたお店であるが、何とこの一月五日で閉店するとのことだった。閉店前に来られてよかったが、寂しいものである。なお、駐車場にはもう一軒、同様にお土産が買えて食事ができる「奥只見レイクハウス」があるので、今後も奥只見でお土産を買ったり食事をしたりすることはできる。ただ、両店の品揃えや食事のメニューは異なっていたので、その片方がなくなるのはやはり残念である。

「インフラツーリズム」への活用を
帰りは来た道ではなく、一度新潟の魚沼市に出てそこから国道二五二号線で福島のみ見町経由で帰るルートを選んだ。この只見町

由のルートは、最も所要時間が掛かる檜枝岐村経由の最短ルートと最も所要時間が短い新潟市経由の最長ルートの中間の距離と時間である。奥只見ダムはこの地域を流れる只見川の最上流部に位置するダムだが、只見川は日本屈指のダムの多い河川であり、奥只見ダムを含めて実に九つのダムがある。それらのうち、とりわけ田子倉湖と只見湖は規模も大きく見応えがある。その夕暮れ時の田子倉湖、そこから流れる只見川も美しい雰囲気であった。

ちょうど先月一〇月、歴史的に貴重な建造物の保存につなげることを目的に土木学会が選定している「土木遺産」に、これら只見川流域の九つのダム「只見川ダム施設群」が、「只見川ダム施設群」は紹介されていないが、今後この同じ地域にある貴重な二つの土木遺産のインフラツーリズム資源としての活用を大いに検討すべきと思う。



自ら「秘境」を名乗る奥只見



遊覧船からの景色は変化に富む



惜しくも閉店した「奥只見ターミナル」



只見川の夕暮れの景色

君は本当に東北人か？と心配されない生き方の事

誠に唐突ながら、あらためて一つ自己紹介をしてみたい—とは言っても、ある意味当誌上らしい？一風変わった口上ではあるが・

※

—私、生まれも育ちも庄内湯野浜です。私の前歯は上顎が所謂渡来系弥生系(縄文系)のシャベル型、下顎が縄文系の楔型になっております。日本人の歯並びの悪さの原因の多くは縄文系の小さな顎に渡来型の大きな歯が生える事にあると言われ、私も下顎の歯並びはきれいで上のみ所謂八重歯になっております。

次に指紋ですが、手指一〇本のうち六本が完全な蹄状紋、一本が完全な渦状紋



奥羽越現像氏紹介

一九七〇年山形県鶴岡市生。札幌、東京を経て、全国の旅の末、仙台に移住。どの本屋に入っても、とりあえず郷土本の棚に向かって立ち読みを始め東北好きである。

そして三本が中間型であり、縄文人は指紋が完全な渦状になっていない「蹄型」であったとされ、他にも片目を顔を歪める事なくつぶる事ができる縄文的特徴を持つ一方で、耳垢は乾燥しており、アルコールには弱く少量しか摂取できないという渡来的特徴も強く表しております。こうしてみると私が縄文・渡来の特徴を半々持ち合わせていると考えて良いかと思われるのですが、これはその昔ご先祖が広島から移住してきた事、そもそも山形県が東北の中でも渡来系の血が濃い地域らしく、これは古代日本海沿岸(現ロシア領沿海州)からの渡来に加えて中近世上方との交流の深さにも起因するものと思われる次第でございます。

と、そんな自己紹介があるものかと思うが、何故今回、己の中の縄文的部分について触れたくなったかと言えば、最近縄文関連で奇妙ながら衝撃的な内容の報に、立て続けに触れてあらためて喚起されてしまったようなのである。

その情報の一つが、「邪馬台国」と言え、今更書くまでもなく長年九州説と畿内説が主流とされ、他の全国各地に手を挙げる候補地は妄説と切り捨てられてきた感

のある案件だが、故に長らく無縁の事と遠くに傍観してきた我が東北としては近年「邪馬台国説」で掲示された「邪馬台国岩手説」が衝撃的であった記憶がまざまざと蘇るところでもある。実は現在、学会上の主流とされる九州・畿内説とは別に、強い説得力を以って一般庶民間で熱く支持されているのが、西の阿波(徳島)説、および東の常陸(茨城)説なのである。

阿波徳島説については、一九七〇年代既に地元郷土史家による提唱が為され、四国の古地名が全国で唯一「姫」の付く最高位の名称であった事、出雲・諏訪といった大社の元宮が実は阿波にあつたらしい事、全国の「風土記」のうち阿波のものだけが禁書とされ、卑弥呼の墓とされる古墳・神社が存在する事などを根拠として古今数冊の書籍も著されている他、近年は四国全体を盛り上げようという地域興しの場面でも勢いづく、ネット上の動画も多く出回る状況なのである。

一方の、東の常陸説もまた幾つもの大きな根拠を携え負けてはいない。その根拠の三大柱と言え、鹿島神社・香取神社という古代より建つ両大社の存在そして縄文時代以来、現在に至るまで人口が常に列島最大且つ一度たりとも衰えた事がない、更には最も高位の人物を葬ったとされる

前方後円墳が全国で群を抜き多いという土地柄である。鹿島・香取両社については、なるほどその存在自体が謎めいている。大抵は、出雲の国譲りに貢献した兄弟武甕という事で、東国蝦夷に睨みを利かせる軍事拠点の神という意味合いで創建されたとの説明になるが、神宮由緒や古文書では「神武天皇元年」創建としており、つまりは蝦夷対策以前という事になり矛盾する。

更には、かの中臣鎌足の出生地であるとの説もある事から、一体常陸国とは何なのか—と謎が深まるばかりなのである。一説には、卑弥呼は人々の信仰する太陽に最も近い場所に住んだとされ、そこが東国の果て・常陸であり、鹿島の地には「高天原」という地名が今も実在する。日出る地・常陸、または日高見の国は東国であり、また奥羽・東北でもある。邪馬台国が日高見国にあつたとする説の台頭は、あらためて縄文的なるものの復権を印象づけるに、東北人を興奮させずにおかない—当時既に縄文系と渡来系は深く混交していたはずだが、邪馬台国の基底にあつた感性や価値観は縄文的であつたか、それとも所謂弥生的であつたのだろうか

は気になるところである。しかしながら、東北人である事を日々誇っているかのような私ですら己の「縄文的」とも思える部分を確かに認め、愛し生かしているかと言え、大いに疑問である。むしろ管理社会に従順で、画一的である事を是とする「弥生的」感性の方が生きていて、縄文的感性なるものに苛立ちや生きにくさを感じ、これを随分抑え込んで日々暮らしている気もするのだ。

草木塔再考
8/5 13:00 - 16:30 日暮 (予定)

場所 米沢市公民館 大会議室
定員 先着 80名
資料 500円

年夏に米沢市で催された草木供養塔シンポジウムより



遠野市街地夜景



重湍溪



重湍溪界限

シリーズ 遠野の自然

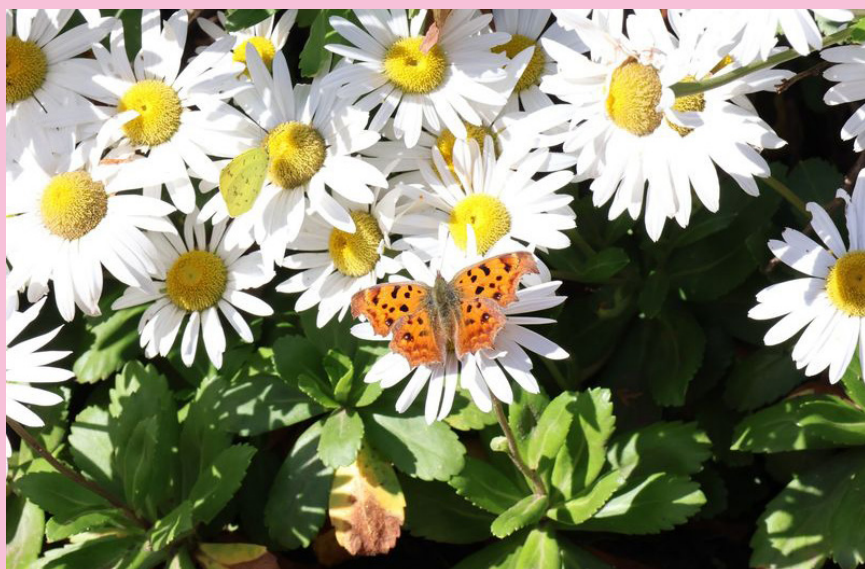
「遠野の立冬」

遠野 1000 景より

関東圏では、十一月の初めは、まるで夏に戻ったような天候で暑かった。そこから突然に、非常に短い秋を一番に通り越して冬に突入した。
心身ともに秋にゆっくり順応するヒマもなかったし、秋を楽しむ暇もなかった今年である。
それでも四季は順繰りに回り、春に戻ることはない。イレギュラーな四季の循環に、人間だけがあわてふためいているように思える。
遠野の木々はちゃんと紅葉を迎えている。きつと、気温だけではない自然のすべてのリズムが植物にはちゃんと聞こえて、それに合わせて生きているからだろう。見習う必要があると思う。



落ち葉のじゅうたん



ハマギクとキタテハ



光るススキとトンボ



クリキノコ



柿の実



写真でお伝えする 東北の風景

「釜石 まつり」

写真撮影
尾崎匠

